やまとの名品『紙漉村旅日記』自筆原稿・向日庵私家版

▶【かみすきむらたびにっき】

寿岳文章・静子 著

上：自筆原稿

昭和12～15年

縦32.8cm　横23.5cm

下：向日庵私家版

昭和18年刊

縦32.1cm　横22.5cm

DATA

❖自ら訪ね、集め歩いた手漉紙の現地報告

戦争がおわった暁には、この由緒正しい手技、この尊い伝統工芸は、正しい姿に於いて、一日も早く復活してほしい。

と願った寿岳文章（一九〇〇―一九九二）は、イギリス詩人ブレイクに関する研究とイタリア詩人ダンテ『神曲』の翻訳で知られる英文学者であり、和紙文化研究家としては先駆的なフィールドワーカーです。

掲出の自筆原稿は、太平洋戦争突入へ近づき始める昭和十二年から十五年にかけ、静子夫人と共に、東北から九州までのめぼしい紙漉村の現地調査をした際の旅日記です。古老に尋ね、見聞きした手漉紙に関する史実や伝統が詳しく記されています。

掲出の本は、越中産本高熊（現富山県八尾町）の和紙を本文用紙とし、それぞれの紙漉村の景観写真をコロタイプ印刷したものに、文字を十二ポイント活字で組版。歩き集めた代表的な産紙をサンプルとし、虫害の恐れのない蒟蒻粉糊で貼り付けてあります。昭和十八年、夫婦手ずからの装訂により、向日庵私家版として限定百五十部で刊行したものです。住まいを「向日庵」（京都府向日市）と名付けたのは、若い頃から傾倒していたブレイクの向日葵の詩に因んでともいわれています。

私製本へのこだわりは、ブレイクから「民藝運動」への道を歩み、ブームを起した柳宗悦との交流からの影響でしょう。民藝運動が、日常的な暮らしの中で使われてきた手仕事の日用品の中に、「用の美」を見出し、活用する日本独自の運動だからです。

こと書物に対して、最も重要な素材でもある「和紙の美」を追求した寿岳文章。古来より現地に根付いている日本の文化財である「和紙を漉く人と産地」を訪ね歩いた研究は、学術的にも高く評価されています。

（天理図書館　倉石　実）

＜天理図書館のお知らせ＞

Tel 0743-63-9200　URL https://www.tcl.gr.jp/

◇平日（午前９時～午後５時半）　土・日・祝（午前９時～午後４時半）

○４月の休館日：４日・11日・18日・25日・30日

○本書は、今年開催する展覧会「書物の歴史－和漢書の〝かたち〟を視る－」に出品します。